

「真実の持つ力」

牛田匡牧師

聖書 ヨハネによる福音書 5章 31-40節

ここ数日間、まだ梅雨は明けていないのにもかかわらず、まるで夏が来たかのような猛暑が続いています。皆様は、お変わりなくお過ごしでしょうか。日本の夏の平均気温が観測史上一番暑かったのは昨年だそうですし、歴代5位までもここ5年間で占めているのだそうです。そのことから、地球温暖化、気候変動が年々進行し、深刻化しているということが分かります。今日は7月7日、七夕です。夜には星空が見えるでしょうか。ここ数年はずっと天気が悪かった記憶がありますので、久しぶりに七夕の夜に星空が見えるかもしれません。

そんな今日ですが、今日はもう一つ大きな出来事として、東京で都知事選挙が行われています。私は大阪にいますので、直接見聞きはしませんでした。連日の報道では、候補者の数も、またその選挙活動のあり方も、前代未聞の混乱ぶりだったようです。非常識と言いますか、確信犯と言いますか、インターネットの中では、玉石混交の賛否両論が繰り広げられて来ていたようですが、大きく注目されているのは、2期8年を務めた現職知事が再選するか、その再選を阻止して交代するか、という点です。東京都はあの小さな面積の中に、約1400万人の人が住み、年間予算は約15兆円ですから、日本の中でも最大の都市であり、なおかつ世界の中でも一つの国家並みとも言える規模となっています。そのために今回の都知事選は、単に一つの県知事選挙というだけではなく、日本社会全体の今後の方向性が示される選挙でもあると思っています。

日本では、政治に無関心だと答える人が大半とはいえ、2年前に銃撃されて亡くなった安倍晋三元首相と言ひ、現職の知事と言ひ、あちこちで様々に嘘に嘘を重ねる人が、何故人気があるのでしょうか。「平気で嘘をつける人は信用できない」というのは、大人の世界でも、子どもの世界でも共通の常識ではないかと思ひます。なのに何故、嘘をつける政治家が大手を振ってられるのか。その理由について、ある人は「誰だって、1つや2つ、3つや4つ、いくつかの嘘をついて、後ろめたい思ひを抱えながら生きている。けれどもそんな後ろめたさを感じないで、あるい

は感じさせないで、嘘をついても平然としてられる姿に、多くの人たちは、逆に憧れを抱いて、自分もあんな風に平気でいられるようでありたい、と思って投票してしまうのではないか」と言っていました。もちろん、他にも政治資金という名の裏金とか、天下りとか、利権とか、様々なことが絡んでいるとは思いますが、自分自身の内面にある真実から目を逸らしたいという思いが、誰の心の中にもあるという指摘には、思わず納得させられました。とはいえ、真実に目を向けることなく、目の前の損得勘定だけで判断する、という流れが今後も続いてしまうことは、大いに心配です。

地球規模での気候変動によって、台風、豪雨、洪水、土砂災害など、自然災害の規模も発生回数も年々増えて来ています。命を守るためにも、短期的な損得勘定ではなく、長期的な視野に立ち、どこに真実があるかを見極めて行動していくことが、地球規模で必要とされる時代になって来ています。これまでの世界の歴史を振り返ってみる時に、「真実に基づいた運動」として挙げられるものの一つに、ガンディーの非暴力不服従運動があると思います。インドをイギリスの植民地支配から独立に導いたガンディーの非暴力不服従運動は、「サティヤグラハ運動」とも呼ばれていますが、その「サティヤグラハ」とは、「真実をしっかりと掴む」という意味のヒンディー語だそうです。真実は愛を含み、それらをしっかりと堅持することは力を生み出す。暴力によってではなく、その力、いわば魂の力によって植民地支配から脱却するというのが、彼の訴えであり、その信念に基づいた彼の行動、姿が多くの人々を動かし、インドの歴史を動かしました。

20 世紀のインドから、更に歴史を遡っていきますと、「真実に基づく運動」は、それこそ聖書に描かれているイエス・キリストにも至ります。今回の聖書の言葉も、そのことを語っていました。「ヨハネによる福音書」5章31節からですが、「31 もし、私が自分自身について証しをするなら、私の証しは真実ではない。32 私について証しする方は別におられる」……。唐突で何を言っているのかが分かりづらいかもしれませんが、ここで「証し」と言われている言葉は、裁判の場面における「証言」のことです。裁判で被告の弁明をするのに、自分のことを証明し、証言してくれる人が自分の他に誰もいないとなると、その証言は聞いている人々に「嘘かも

しれない」と受け取られるかもしれません。証言者が他にいる、さらにその証言者は誰なのか、ということが裁判では重要でした。イエス様は「私について証しする方は別におられる」(32)とされました。「私の証人は、他ならない天の父だ」というわけです。そして「その方が私について証しする証しは真実である」とも言われました。続く33節から36節は、ユダヤの人々の間で一目置かれていた洗礼者ヨハネについて言及しています。彼もまた歴代の預言者と同じく真理について述べ伝える預言者の一人でしたが、彼は人々によって証しされ、支持されていました。35節「ヨハネは燃えて輝く^{ともしび}灯であった」とは、「他人から火をつけられて輝く灯だった」ということです。それに対して、イエス様は人間からではなく、天の父、神から証しされ、支持されていると言われました。そしてその天の父からの証しとは、他でもない「私が行っている業そのもの」だと言うのです。つまり、言い換えれば、「私がやっていることを見たら、私が父から遣わされていることが分かるでしょ。これらの行動は、神からの支えがなければ、決して出来ないことですよ」ということなのだろうと思います。

続く39節では、まずユダヤ人たちに「あなたがたは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を調べている」と言われました。それは律法(ヘブライ語聖書)をしっかり学べば、永遠の命に至る(バルク書 4:1)という考え方があったことを踏まえての言葉ですが、イエス様は更に一步踏み込んで「聖書は私について証しをするものだ」と言われました。これは「イエス・キリストのことは、何百年も以前から、旧約聖書の中に預言されていました」という表層的な意味で、イエス様が自己弁明したのではなく、「私の行っていること、その業、行動の全ては、私個人から出たものではなく、神様から出たものであり、聖書に裏付けられ、支えられているものなんだよ」ということを言われたのだろうと思います。だからこそ、40節では「それなのに、あなたがたは、命を得るために私のもとに来ようとしない」、私と共に、私のように行動を起こそうとしない、と嘆かれたのでしょ。

イエス様がなぜ、その生涯を通して力強く歩めたのか、敵対者から迫害されても、逃げることなく歩むことができたのか。それはイエス様が神の子だから、生まれた時からのスーパーマン、超能力者としてすごかったのではなく、ヘブライ語聖書の

中に記されている通り、この世界を創られた命の神は、全ての命を愛おしまれ、大切にされる方であり、それらが傷つけられたり、失われたりすることを望んでおられない。窮地にあっても、かならず助けがある。いつでも神様が共にいて下さって、自分は一人ではない。そのようなことの一つ一つに全幅の信頼を寄せて、一歩ずつ歩いて来られた。その結果が、イエス・キリストのこの地上での歩みに他ならなかったのだらうと思います。

今から約 2000 年前にパレスチナの地を歩まれたイエス様は、時の権力者たちによって暴力をふるわれ、十字架刑という処刑に処せられました。しかし、真実をしっかりと掴んでいた彼は、敵対者たちを前にしても妥協することもなく、十字架から逃げることもなく、非暴力不服従を貫き、真実の持つ力、真実だけが持つ力によって、真実に踏みとどまり、暴力に抵抗しました。その結果、イエス様は復活させられ、その魂、生き様は後の弟子たち、今日に至るまでの多くの人々の中に息づいています。

今日の「招きの詞」は、箴言の言葉でした。「守るべきものすべてにも増して、あなたの心を保て。命はそこから来る」(4:23)……。命はどこから来るか。命は聖書に中にある、と言って、聖書を読んだり、暗記したり、学習したり、研究したりすることが大切なわけではありません。神様から創られたあなた自身の心の中に、真実を見分け、命へと至る心があります。その心に嘘をつくのではなく、正直に、素直になって向き合う時、私たちは真実をしっかりと掴み、命へと至る道、イエス様の後に従って歩む道へと、導かれて行くのだと思います。

権力にそんたく忖度するのではなく、嘘に嘘を重ねるのではなく、真実に生きることができる。そこに他ならない神様も共にいて下さる。だからこそ正しい道を歩いていくことができる。その心と力が与えられていることを信頼して、今日もここから、私たちは一歩を踏み出して参ります。